

巻 頭 言

環境変動と資源管理

浜廻りをしていると最近では年明けになっても水温が下がらず、海藻の生育が悪くなっているとか、冬になれば北東の風が収まって西風になる時期なのに、北東の風が吹き続けているなど、「最近海が変わった」と過去の経験と合わない海況となっている話を聞きます。

生物の成育には環境条件が大きく影響することが知られています。様々な生物にはそれぞれ生育や産卵には適した水温や塩分、光、流れや基質（底質）などがあり、それに基づいた生息可能な範囲があります。一方で、数十年周期の環境変動によって、魚種ごとに生息数が影響を受けていることが知られています。

その中でも、近年は、地球温暖化の影響であるのか、海水温が徐々に上昇してきています。水温が上昇することで、温帯性魚類であるブリが北海道で大量に漁獲されるなど、分布域が北側に移る現象や、産卵場への南下回遊が遅れることでスルメイカの産卵、ふ化や生育に影響を与えていると言われています。また、静岡県も含めた太平洋沿岸では黒潮の流路の変化によって大きな影響を受け、伊豆半島では黒潮の大蛇行による水温の上昇によってカジメの磯焼けが発生することが知られています。しかしながら、黒潮の流路との関係が不明確な藻場の消失やそれに伴うアワビ等の漁獲量の減少がみられています。

それ以外にも、高水温で代謝量が増して魚体が小型化することや、成長が遅れることで産卵の開始時期が遅れるとか、産卵量が減ったりすることも想定されます。さらに、餌生物や捕食者の増減を含めた影響、海洋の酸性化、海流等の変化などが、水産資源の資源変動に直接的、間接的に影響を与えていくことが想定されます。

一方で、資源変動とは別に、漁業においては、操業が波浪や潮の流れの強弱に影響を受け、漁獲量の増減につながっていることもあります。

様々な魚種で漁獲量が減ってきている現状の中で、資源管理を進めることが今まで以上に求められています。そのためには正確な資源評価が必要となり、国も資源評価に基づき資源管理をすることを法的に定めています。今後環境が変動していく中で、環境の生物への影響を考慮した上で、如何に正確に評価し、適切な管理に繋げていくのか、いろいろな検討が必要であると思います。

(伊藤 円)